

いま No.1554 子どもたちは

この小さな学び舎で

6

ひとり、ふたり 広がる音の輪

ると、ホール中央のトランポリンの周りを歩いていた幼稚部のゆりこちゃん(5)から、笑みがこぼれた。演奏が途切れると立ち止まり、「次の曲は何？」と確認するように、飯塚先生に視線を送る。

昨年12月中旬、私立特別支援学校、愛育養護学校(東京都港区)。お昼が近くなったころ、1階ホールからピアノの音色が聞こえてきた。この日は、外部から先生がやってくる「アートの日」だ。

音楽担当の飯塚暁子先生(56)がグランドピアノを奏で

そっと、太鼓の音が加わっ

た。ばちを持つのは、2年のあさひくん(8)だ。近くのソファでは、少し体調を崩していたのか、同級生が横になっている。「トン、トン、トン」。同級生の様子を横目で見ながら、太鼓を合わせる。

体の揺れ、手の動き、視線の先。30年近く愛育を訪れて

いる飯塚先生は、小さな反応を見ながら演奏を続ける。「ピアノで後方支援をした

り、子どもたちの雰囲気を取り、子どもたちのリードしたり。あくまでも子どもファーストです」。西原彰宏先生(64)は「歩くことや跳びはねること、そうした表現



飯塚暁子先生(奥)の演奏に合わせて、4年の男子は元気よく体を動かしていた＝東京都港区

ひとつひとつが音楽の始まりだと思えます」と話す。そもそも、この輪に参加するかどうかも、子どもたち自身が決める。ひとり、ふたり……。この日は、他の部屋や庭で遊んでいた数人が、自然とホールに集まってきた。

そのひとり、4年の男子の子(10)は毎回、この時間を心待ちにしている。小走りでホールにやってくる。飯塚先生に「ねえ、次の曲はどうする?」。明るい声で、飯塚先生の演奏をリードしていく。「幸せなら手をたたこう、はどう?」と飯塚先生。「いいね!」と応じた男子の子は、軽快なピアノに合わせて「ねえみんな、手をたたいてみて!」と呼びかける。庭に向かって歩いていった5年のちかさん(11)は、「ばん」と手を鳴らした。

歌いながらホールの様子を見ていた男子の子は「しあわせなら……うーん、逆さまになるう!」。いつの間にか、5、6人が集まっている。先生も子どもたちも、懸命に頭を足元に向けて下げた。

(円山史)